投稿論文

ジェンダー化される留学とキャリア

北野知佳
（立命館大学）

本稿の目的は、日本人短期留学経験者が、職業キャリア及びライフ・キャリア形成上、英語留学経験の意味づけをどのように行うのか、ジェンダー的視座から明らかにすることである。順次的探索的デザインに基づき、まず、短期英語留学を行なう大学生（男2人、女5人）への半構造化インタビューで得られた語りの主題分析を行なった。次に、大学生（男121人、女178人）に質問紙調査を行い、ジェンダー、留学希望の有無、結婚後の理想的な働き方を変数として統計分析を行った。その結果、メディアや政府政策でステレオタイプとしてジェンダー化される留学生像がそのまま投影された語りが大半を占めるわけではなく、留学者としての多様な立ち位置が質的調査で観察された。しかし、男女ともにキャリア形成の根底に男性稼ぎ主型モデルへの支持や受容が根強くあることが質的・量的調査で明らかとなり、留学を活かして社会で活躍したいと希望してもジェンダー規範の内在化がそれを妨げる可能性が示唆された。

キーワード
短期留学、ジェンダー、職業キャリア、ライフ・キャリア

Ⅰ．問題背景

1980年代以降、教育の国際化のための国策の一環として、日本人学生の海外留学が推し進められてきた。2013年6月に発表された「日本再興戦略」（閣議決定）では、留学生政策をめぐる方策の中の一つとして、2020年までに海外へ送り出す日本人留学者数を12万人へ増員することが目標として設定され、日本人留学者数の増加を後押ししてきた。2000年代以降は、語学習得のみならず、グローバル人材育成の実践教育の場として留学が推進され（子島・藤原 2017; 糸井 2015）、留学期間が1か月に満たない「超短期留学」（Shimmi and Ota 2018）や海外体験学習とよばれる留学とキャリアの結びつきが注目されてきている（子島・藤原 2017）。現在、留学の種類は多岐にわたっており、各定義は曖昧であるものの、期間によって短期・中期・長期留学と分類されている。その中でも、「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」（日本学生支

DOI：10.24567/00063802

援機構 2019）によると、日本人の留学者数で最も多いのは 1 か月までの超短期留学であり、日本人の全留学者数の 7 割を占めている。このような短期留学は、他の留学と比べて低コストで参加できる点に加え、就職や就学などの広義でのキャリア形成の一助として、学生の留学経験における満足度や期待度が高まりつつある。留学期間が長いほど、留学が自分のキャリア形成に役に立つという認識がより高い傾向にあるとの報告もある（横田ほか 2016; 新見・岡本 2017）が、短期留学においても、留学経験がキャリアに結びついたと認識されたという研究事例もある。例えば、若林真美らは、2 週間未満の短期海外体験型学習が日本人大学院生 12 人のキャリア形成に与える影響について質的調査を行い、現地での他の留学生との交流や研究交流を通じて、2 週間弱という短期間であっても十分に留学者たちのキャリア形成への志向が強化されると結論づけている（若林ほか 2019）。また、日本学生支援機構（JASSO）が、2013 年度から 2017 年度に渡航した学生（約 57,000 人）に対して行ったアンケート調査のデータをもとに、「留学経験が学習・就職に役立っているか」という項目を留学者の渡航期間別に分析した結果、留学期間に差はなく、約 80% の学生が「役立っている」と回答している（河合塾 2018: 20）。むしろ、渡航期間が 1 か月未満の超短期留学者（36,363 人）は、6 か月以上の中長期留学者（8,383 人）よりも、留学経験が学習や就職といったキャリアに「役立っている」と回答した割合がわずかに高かった。このように、短期留学者についての調査結果や研究事例はあるものの、グローバル人材育成の実践の場として注目され、数の上でも圧倒的大多数を占める短期留学の経験が、留学者たちのキャリア形成とどのように結びついているかについての研究は未開拓の分野である（若林ほか 2019）。

また、留学をキャリア形成の場として注目する上で、見落とすことができないのは、過去十数年の間、女子留学者は男子留学者を数の上で上回り続けている（日本学生支援機構 2019）点であり、1 か月までの短期留学でも同様の傾向にある。特に、英語圏においてその差は大きく、2010 年代においても、いわゆる第一言語として英語が使用されている英語圏の国々に留学した男女比は、約 6:4 の割合で女性が上回り続け、不均衡がある。しかしながら、ジェンダーの側面に関しては、中長期留学に参加した日本人女性の語りについての研究はこれまでなされてきており、女子留学者たちの日本における家父長制社会からの逃亡願望や、英語圏や西洋の人々や文化への憧れを対象とした研究（Kelsky 2001; Takahashi 2013）はあるものの、一方で、増え続ける超短期留学者たちが、どのようにキャリアとジェンダーを結びつけているのか、男女双方の人生におけるキャリアの展望を多角的視点や長期的スパンで捉える社会学的議論は十分になされてきていない。

そこで、本稿では、留学、キャリア、ジェンダーがどのように社会の中で描かれているのかについて文献を整理するとともに、インタビューを通して得られた短期留学者たちの語りを分析する。さらには、留学希望者を含めた大学生へのアンケート調査の

分析結果を補足的に用い、日本人の男女の超短期留学者が、キャリア形成の上で彼らの留学経験の意味づけをどのように行なっているのかを、とりわけ彼らを取り巻くジェンダー規範に着目しながら明らかにする。

Ⅱ．先行研究の整理と検討課題

1．留学とキャリア

そもそも、キャリアという言葉は、広範に教育場面や社会で用いられる一方で、その定義については不明確なままである（菊池 2012; 江利川 2017）。文部科学省によるとキャリアとは、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」（文部科学省 2004）であり、「職業生活、家庭生活、市民生活等の全生活の中で経験する様々な立場や役割を遂行する活動」（文部科学省 2004）とされている。つまり、キャリアとは、必ずしも狭義に、対価として金銭が得られるような職業への就労とは限らない。曖昧ではあるが、キャリアとは、個人の人生を通じた役割の獲得という意味が含有されている。菊池武剋は、前者のような狭義でのキャリアを「職業キャリア」、後者のような広義でのキャリアを「ライフ・キャリア」と位置づけ、この二者が社会において渾然一体となって使用されていることを指摘している（菊池 2012）。

留学場面では特に、両キャリアは同質化されている。留学場面で、とりわけ注目すべき政府の政策として、2013年10月より始まった留学促進プロジェクト「トビタテ！留学 JAPAN」（文部科学省 2014）がある。このプロジェクトでは、「意欲と能力ある全ての日本の若者が、海外留学に自ら一歩を踏み出す機運を醸成すること」（文部科学省 2014）が目的とされており、2014年からは「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN　日本代表プログラム～」が始動した。応募者が計画した留学内容が認められれば、返還の必要のない奨学金が付与される制度であり、対象の留学期間は、28日以上2年以内と、超短期留学も対象となっている。また、2015年からは、応募者採択基準として、留学計画ではなく人物評価重視とした「海外初チャレンジ枠」が設けられ、留学を通したキャリア形成プランが確固たるものではなくても、採用されやすい政策展開がなされていることがわかる。このプロジェクトでは、大学生の留学の意義として、「苦労や葛藤を乗り越える経験」によって得られる「挑戦する力」や「積極性」など、客観的尺度では測りがたい個々人の内面の成長、ひいては、ライフ・キャリアにも職業キャリアにもつながる側面が強調されている。一方で、同プロジェクトの Web サイト（文部科学省 2014）において、具体的に留学経験を将来にどのように役立てるかについては、職業選択や求職活動など、職業キャリアに直結するロールモデルが示されている。公領域における職業キャリアと私領域におけるライフ・キャリアの二つを完全に切り分けることは不可能であるが、それぞれがあたかも一枚岩であるかのように描かれることに対して、特にジェンダー的視座からの批判的まなざしが必要である。20世紀後半の第二波

フェミニズムで中心的な議題であった公領域と私領域の分離と男女間格差の問題（木村 2000）は、日本社会において未解決（西村 2014）であることを念頭に置く必要がある。例えば、具体的な数値を例にあげると、2017 年の男性の非正規雇用率は 12.7% であるのに対して、女性の割合は 38.3% であり（OECD 2019a）、日本女性の国会議員、大臣、副総理、総理の割合は、他の先進諸国と比べても圧倒的に低く、15.8% にとどまっている（OECD 2019b）。このような日本人女性の非正規雇用率の高さや、行政機関の主要ポストに就く女性の割合の低さにより、女性が日本社会の公領域で活躍しているとは言い難く、公領域と私領域の間に大きな格差が現存することは明らかである。

それでは、公領域と私領域のそれぞれにおいて、職業キャリアとライフ・キャリア、ならびに留学は社会の中でどのように結びつけられ描かれているのか。ジェンダー的視座に重点をおき、留学に関わる政府政策方針ならびに留学斡旋会社の広告に見られる日本人留学生像を分析していく。

2. 留学とジェンダー

文部科学省主導の留学政策の上で、キーワードの一つとしてあげられているのは〈グローバル人材〉である。特に、英語習得は必要不可欠なものとして政府政策の中で決まり文句化している（Kitamura 2016）。さらに、カトウエツコ（Kato Etsuko）は、政府政策の中で描かれるグローバル人材像は、エリートであり、男性性（男らしさ）が強調された、日本国の経済に尽力する日本人アイデンティティの強固な保持者であると指摘する（Kato 2015）。例えば、経済産業省によって定義されている〈グローバル人材〉とは次の 3 要素、「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力、Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」（グローバル人材育成推進会議 2012: 8）を兼ね備えた、世界を牽引する者として定義されており、要素Ⅰについては、「二者間折衝」「多数間折衝」（グローバル人材育成推進会議 2012: 9）レベルに到達していることが目標とされていることから、現状では自ずとエリートと想定される。

また、グローバル人材を掲げる政策文書には、〈競争〉〈戦略〉や〈国〉など、闘争的な言葉が多用され（Kato 2015）、男性性に関わる言説とのつながりが強固である。留学場面も例外ではなく、「トビタテ！留学 JAPAN」（文部科学省 2014）の広告は、グローバル人材として理想化された男性性が鮮明に描き出されている（図 1）。「この地球を、この国を、この自分を変えられるのは自分しかいない」（文部科学省 2014）、というキャッチフレーズを背景に特撮ヒーローの登場人物たちを彷彿させる男女が佇んでいる。闘争的イメージや、ファシズムによって奨励されるようなイメージについて、男性学の先駆者であるレイウィン・コンネル（Raewyn W. Connell）は、1980 年代後半のアメリカでのガンロビーでの男性たちを例にあげ、特定の場面における「ヘゲモニックな男性性（hegemonic masculinity）」（Connell 2005: 212-3）としている。ヘゲモ

図1　「トビタテ！留学JAPAN」のWEB広告
（文部科学省2014）

ニックな男性性は、家父長制の社会で、その他の男性性と女性性に対して文化的に優位な立場にあり、また、イデオロギー上、それら従属者からの合意により成り立っている（Connell and Messerschmidt 2005）。図1のイメージは、中心に小柄な日本人と思しき男性が配置され、周辺には、資本主義社会では支持されにくい筋肉質のエリート風ではない男性と、正面から体をそらし、身体的動作が制約されるであろうミニスカートを履いた女性が配されている。順に、日本人の「ビジネスマン的男性性」（Connell and Wood 2005）、「周縁化された男性性」（Connell 2005: 78）、「従属的な女性性」（Connell 2005: 11）の表象であると言える。いずれの女性、男性も競争に勝ち抜き、リーダーシップをとり、グローバルな資本主義経済の中で男性中心主義的な働き方に追随することが前景化されている。

グローバル人材育成を目指した留学政策の中には、労働市場における男女間格差に関する言及はない。対照的に、「トビタテ！留学JAPAN」の政府政策ウェブサイトで紹介されている、女性の私領域での成功体験として焦点化されているものに、留学先での「恋バナ（恋愛話）」がある。「留学先でのあなたの恋バナを教えて～！」（文部科学省2014）と題し、日本人女性と白人男性のイラスト（図2）を添え、男女の留学先での恋愛エピソードが載せられている。9例のエピソード中、4例は留学先で出会った外国人男性と日本人女性の恋愛成就談、3例は留学先で出会った外国人女性に対する日本人男性の失恋ならびに日本人男性の不人気談である。日本人女性と外国人男性との恋愛成就談が、不均衡に掲載され、私領域の恋愛話の中心に据えられた女子留学経験者の姿が浮かび上がる事例と言える。

図2　「留学先でのあなたの恋バナを教えて～！」のWEBトップページ
（文部科学省2014）

さらに、民間の留学斡旋会社は、私領域における日本人女性により焦点をあてている。特徴的なのは、女子専用の留学プランや留学情報を提供している留学斡旋会社が存在することである。また、他の留学斡旋会社の広告においても、日本人女性が被写

体となったイメージが多用され、〈挑戦する人生へ〉〈あなたを強くする留学へ〉といった啓発的な文言が並べられている。各種英語資格試験情報など職業キャリア上でのキャリアアップのためのツールを紹介しつつ、日本人女子の留学体験談として、「現地で就職 & 結婚相手にも出会い人生が変わった」という事例をあげる留学斡旋会社もあり、職業キャリアとライフ・キャリアが、より渾然一体となり提示されている（留学 Debut n.d.）。このように、日本人女性が英語圏・西洋圏で現地の男性と恋愛に陥りやすいというステレオタイプを利用し、留学市場が日本人女性を主たるターゲット消費者としていることは、すでに他の研究でも指摘されている（Takahashi 2013; Kitamura 2016; Kitano 2020）。

以上のような公・私領域での留学の描かれ方を踏まえ、日本人留学者のうち特にマジョリティグループである英語圏へ短期留学を行う学生たちが、どのように彼らの留学経験とキャリア形成を結びつけているのか。その結びつけ方に、ジェンダー規範の捉え方はどのように影響を及ぼし得るのか、半構造化インタビューの分析、ならびに大学生へのアンケート調査分析を行い考察する。

Ⅲ．研究方法

本稿では、“順次的探索的デザイン”（Exploratory sequential research design）（Creswell 2007）を用いた。この方法は、現象を探求することに主眼を置き、第一段階として質的調査・分析を行なった上で、第二段階として補完的に量的調査を行う。具体的には、第一段階では、日本人短期留学者たち（7人：女5人、男2人）の半構造化インタビューを行い、その分析をもとに、第二段階で関西圏に在住する大学生（299人：女178人、男121人）へのアンケート調査を行った。第一段階で、短期留学者たちの思考プロセスを彼らの語りから広範に分析できる点で、半構造化インタビューを第一義的に行うことは妥当であると考えられる。また、量的調査データを用いることにより、このモデルは理論を検証するのに適している。

第一段階の対象者は、日本国籍を有し、日本語を母語として習得してきた大学生のうち、英語圏への短期留学を志すものとした。表1が本稿のインタビュイーの一覧である。

表1　質的調査　インタビュイーのプロファイル

仮称	性別	所属	年齢	これまでの海外留学経験	インタビュー実施日（2014年）（1回目、2回目、3回目）
1）アコ	女性	人文社会	19	カナダ（2週間）	7月19日（40分）、8月20日（18分）、10月15日（50分）
2）チアキ	女性	法	20	無し	7月10日（53分）、8月20日（19分）、10月8日（45分）
3）カイト	男性	法	19	アメリカ（3週間）	7月11日（53分）、8月20日（21分）、10月14日（61分）
4）ミナミ	女性	外国語	19	無し	7月11日（53分）、8月20日（17分）、10月6日（68分）
5）スミレ	女性	外国語	21	モンゴル（1週間） ニュージランド（2週間）	7月8日（55分）、8月20日（18分）、10月24日（40分）
6）ユキ	女性	医療	20	中国（1週間）	7月9日（58分）、8月20日（18分）、10月6日（67分）
7）ユウタ	男性	法	19	無し	7月10日（42分）、8月20日（22分）、10月8日（57分）

データ収集のプロセスとして、まず、著者の居住する関西圏の大学（7校）に調査協力依頼文書を送付した。了承を得られたのは2校（私立1校、国立1校）であり、うち1校（難関国立）で行われた語学習得ならびに異文化理解力向上を目的としたイギリスへの短期留学説明会に著者も参加をし、インタビュー調査の協力を受講生に呼びかけた。著者は、大学院生（調査当時）であること、また、大学側からインタビューの了承を得ており、受講生の当該プログラムの成績評価と自身の研究は一切の関係がないことを説明し、7人（表1）の協力者を得た。いずれの協力者も、同じ難関国立大学の学部生であり、同じ留学プログラムの参加者である。それぞれの専攻分野、年齢については表1に示す通りである。この短期留学は、2014年8月18日から9月19日のプログラムで、イギリスの郊外の寮に滞在し、大学で実施される語学の授業に参加するというものである。インタビューは、留学前、留学中、留学後の計3回、各20分～70分程度の長さで実施された。留学中は、著者も現地に赴きインタビューを行った。インタビューは一対一で、すべて大学内のカフェテリアで実施した。すべてのデータは、インタビュイーの了承のもと録音され、著者によってテープ起こしがなされた。また、後述のインタビュー結果と考察では、インタビュイーの語りが、留学前（1回目）、留学中（2回目）、留学後（3回目）の各インタビューのいずれの回でなされたものであったかを、インタビュイーの語りの抜粋後に、それぞれ「1回目」「2回目」「3回目」として示す。また、著者の語りについては、“チカ”として表記する。

量的調査については、他の研究者の協力を得て、2017年11月から2018年1月の間、関西圏の大学に通う大学生に対して実施した。また、留学関連の掲示板で情報収集を行なっていた大学生に対しても、個別に声をかけアンケート協力の依頼を行なった。

なお、本調査は、大阪大学大学院人間科学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施した。

Ⅳ．分析方法

インタビュイーから得られた語りの分析には、「意味生成の反復パターンを探すプロセス」（Braun and Clarke 2006: 86）として有効な主題分析法を採用した。本稿は、1）帰納的（inductive）かつ2）理論的（theoretical）な主題分析を融合した。帰納的分析とは「既存の符号化フレームや研究者の分析的な予想にあてはめることなくデータの符号化を行なうこと」（Braun and Clarke 2006: 83）であり、理論的分析とは、「データの意味論的内容を超え、データの意味論的内容を形成する根底となるアイデアや前提、概念化、イデオロギーを明らかにしたり、分析すること」（Braun and Clarke 2006: 84）である。インタビューを実施する研究初期段階では、一定程度の先行文献研究を行なってはいたものの、研究の問いは曖昧であり、半構造化インタビューによって得られた膨大な量の語りを分析する際に主に帰納的分析を用いた。帰納的分析から得られた符号をもとに、主題を見つけ、物語を作っていく理論的分析を、改めて先行文献研究と同時に行った。インタ

ビュイーの語りの分析と先行文献研究は並行し繰り返し行い、本稿は、帰納的分析と理論的分析を融合した方法を用いた。

また、アンケート調査で得られたデータの分析には、ピアソンのカイ二乗検定とフィッシャーの正確確率検定を使用した。

V．質的調査で得られた結果と考察

1．職業キャリア型の語り

まずは、留学前の段階から、今回の留学経験を職業キャリアに結びつけたいとしていた4人のインタビュイー（ユキ（女）、アコ（女）、ミナミ（女）、カイト（男））を〈職業キャリア型〉と位置づけ、彼らの語りについて見ていく。留学前のインタビューでは、英語習得ならびに留学経験は職業キャリア形成のために不可欠とする考えが全員に見られた。特に、女性の語りの特徴としては、英語圏での女性たちの生活、ならびに働き方の両側面への憧れの眼差しが見られた。女性をターゲットとした留学斡旋会社の広告で謳われていたように、英語や英語圏文化の習熟が、幅広く女性のキャリアに生かされるものとしてイメージされており、活躍の舞台は英語圏として認識されていた。例えば、医療系学部に所属するユキは、男性中心主義の日本における医療現場に直面する一方で、アメリカには女性が活躍できる社会があると語った。

> 女の人がお医者さんになると結婚しにくいとか。子ども生みにくいとか。生む年齢でやめちゃうし、他の女医さんたちからの風当たりもかなり強いんですよね。理由は、「私は我慢して仕事してるのに、あなただけ休んで」、みたいな。本当にあるみたいで。アメリカは、良い環境かもしれなくて。アメリカでは、実際に現役で働いているお医者さんはまだ、女の人が少ないけど、大学とかだと、女の人、男の人、半分半分くらいって（ユキ1回目）。

ユキは、医療系の国際機関で働くためには英語は絶対条件であると考え、短期留学を決意した。ユキは、インタビュイーの中で「憧れ」という言葉を最も多く使用しており、アメリカのファッション雑誌を愛読し、「海外生活に憧れ」（ユキ1回目）を持っていた。ユキにとって、ライフ・キャリアとして英語圏で生活することと、職業キャリアとして英語を使った国際的な医療系の仕事に就くことの両方が目標であったと分析できる。留学後も、国際機関で働きたいという夢に変化はなかったが、他のインタビュイーたちと比しても、目下に迫った膨大な課題や研修に追われるなど、多忙であり、国際機関で働くための英語学習や情報検索など、通常の学業に加えて留学後に新たに何かに取り組もうとする姿勢は見られなかった。

人文学系学部に所属するアコは、カナダの社会、教育に対する憧れの眼差しを見せた。高校時代にカナダに短期ホームステイを行なった経験があり、カナダ社会や女性の活躍、教育を理想化して捉えていた。海外就職について抵抗がなく、今回の留学経験を通してその思いに変化はなかった。

> カナダにも興味があって、実際行って

みたので、一人一人大事にしてるっていうか。（中略）なんというか、一人一人に焦点をあてた教育？だったり、考えを問う、プロセスが大事にされてるな、って。（アコ1回目）

アコ：ちょっと、男女のイメージというか。日本はまだ女性が優遇されてないっていうイメージがあって、カナダのところだったら、すごい働きやすいところもあるし。
チカ：じゃ、将来的には、海外で就職するってことも考えてますか？
アコ：考えてます。
（アコ1回目）

今回のイギリスでの短期留学は、寮生活であり、期待に反して日本人との接点が多かったことにより、アコのアメリカやカナダの大学へ留学したいという思いは、帰国後ますます強くなり、3年以内にアメリカかカナダへ留学する意思を固めていた。

でもアメリカとかカナダは大学とかはすごい充実してるし、やっぱ憧れとかもありますね（アコ3回目）。

ミナミの今回の留学動機は、彼女の将来の夢とつながっていた。高校時代のカナダ人の女性英語教員に憧れ、日本語教師を目指すようになる。

高校の時にALTの先生がカナダ人の女の人やったんですけど、その人が、すごい、カナダのこととかいっぱい話してくれて、めっちゃかっこいいなって思ったんですよ。で、それで、こんな人になりたいなって思って。じゃ、逆はどうやろって。私が日本語を教えて、日本のいろいろ知らん人に教えてあげたいなって思いました（ミナミ1回目）。

ミナミも、ユキやアコと同じく、海外勤務についての抵抗は少なく、留学前インタビュー時から「できれば海外にいきたい」（ミナミ1回目）という語りを行った。また、メディアの影響を受け、ミナミは、将来「オランダ人と結婚したい」（ミナミ1回目）という夢を数年間強く抱いており、西洋人男性に対する憧れも見せた。日本語専攻のミナミは、ロシア語を外国語として履修していた。留学中、クラスメイトのカザフスタンの留学生からロシア語と日本語の翻訳家になることを勧められた彼女は、このことがきっかけで、日本語を使った国際的な仕事に対する思いが強くなり、ロシアに語学留学する資金作りのため、帰国日にその足で、空港でアルバイト面接を受けた。

一方、男子学生であるカイトについては、ライフ・キャリア形成については日本をベースとした思考を持っていた。カイトは、日本で最も多く官僚を輩出している超難関大学への入学がかなわず、官僚になるという夢が絶たれたと感じてはいたものの、高校時代の先生や留学センターの職員から、留学で「いろんなこと経験したり、いろんな人見てたら、自分がするべきって思

う仕事が見つかるから」（カイト1回目）とアドバイスを受け、職業キャリアに対する視野を広げることを目的に、今回の留学プログラムに参加した。官僚になりたいという思いは、諦めきれておらず、官僚になれればという彼の思いは、一見すると、政府が推し進めてきたエリートである「グローバル人材」の投影のように見受けられる。しかし、前述の女子学生3人の語りと違い、海外勤務については消極的な姿勢が見られた。

カイト：（高校時代）なんか最初、幸せな家庭ができたらいいよなって話してて、あんまり、単身赴任とかでバタバタしたくないし、できたらどっかで落ち着きたいなみたいな。
チカ：　そうなんですか。
カイト：世界を股にかける男みたいなんあるじゃないですか。
チカ：　（笑）
カイト：すげ～海外飛び回ってかっこいい人いるじゃないですか。あんまり憧れないですね。せっかく家庭おんのに。寂しそうやなみたいな。
チカ：　そっか。
（カイト1回目）

カイトは、海外勤務に抵抗を感じており、日本で幸せな家庭を築きたいという思いを留学前後で一貫して持っていた。留学経験を将来のキャリア形成に活かしたいという思いが、今回の留学に参加する動機づけとなっていたカイトであったが、留学を通して英語が思ったより上達せず、帰国後は、英語学習よりも法律に関連する資格の取得、大学院への進学など、国内の就職につながる準備を始めた。そこには文部科学省が打ち出した広告キャラクター（図1）のような、グローバルに世界を飛び回るヘゲモニックな男性性の姿はなく、カイトにとっては幸せな家庭を築くことが、国内で職業キャリアを築くことと同じように重要であると分析できる。将来の結婚相手の国籍について話が及ぶと、「海外の人と、結婚するってことは見えないですね」（カイト1回目）と答えており、カイトのライフ・キャリアの基盤として日本社会が根深く存在すると想定できる。ヘゲモニックな男性性とは、イデオロギー上、それらに従属する男性性や女性性からの合意により、優位な立場に立つことが保たれている（Connell and Messerschmidt 2005）とあるように、カイトは、偏差値65レベルの国内有数の難関国立大学の学部に所属し、すでに社会的に優位に立っているが、従属する女性性として対象化される相手、つまりは結婚相手となる日本人女性との関係性や相手からの合意を視野に入れると、海外勤務で常に家を不在にするビジネスマン的男性性とカイトの理想的な男性像とは合致しないと考えられる。カイトの語りは、資本主義社会でグローバルに経済的に優位な立場や稼得能力を得ることが、理想的な男性像であるとは必ずしも言えないことを示唆し、政府が打ち出すグローバル人材像として象徴される、国境を超えて活躍するヘゲモニックな男性性との差異を浮かび上がらせる。

今回の留学の動機が職業キャリアと結びついていた4人の語りを中心にみた結果、注目すべき2点についてまとめる。まず、1点目の特徴として、女子学生については共通して英語圏あるいは西洋社会、具体的には教育や女性の活躍、結婚相手としての西洋人男性など、に羨望の眼差しが見られ、ライフ・キャリア（英語圏での文化・生活）と職業キャリア（海外勤務）を同時に留学と結びつけて理想化する方法が観察できた。2つ目として、上述した女子学生全員（3人）が海外勤務を希望した一方で、男子学生（1人）は、今回の留学経験を経た後も海外赴任に関する不安や障壁を例にあげ、日本勤務を志向した。資本主義の経済的なヒエラルキーの中で国境を越えて活躍するビジネスマン的男性性が、男子留学者にとって理想的な姿であるのかについて、議論の余地があることが示唆された。

2. ライフ・キャリア型の語り

次に、今回の短期留学の動機と職業キャリアの展望との間に強いつながりは見られず、視野を広げたい、とりあえず海外を経験してみたいという語りを行なった3人のインタビュイー（スミレ（女）、チアキ（女）、ユウタ（男））を〈ライフ・キャリア型〉と分類し、彼らの語りについて分析する。彼らの語りの共通点として、英語留学の動機と職業キャリアとが必ずしも結びついていないことがあげられる。例えば、彼らは今回の短期留学の目的について問われ、スミレは「いろんな国を見てみたいって、思ってて。まだ、ヨーロッパ行ったことなかったんで、ちょうど、イギリスいいなぁって思って」（スミレ1回目）としながらも、「なんかそんな、なんで行きたいかって言われると、あんま、わかんないです」（スミレ1回目）と回答した。チアキは「軽く海外を知る目的で、語学研修に行きたい」（チアキ1回目）とし、ユウタは、将来の夢については見つかっていないが、「ちょっと将来的に海外にも住みたい」（ユウタ1回目）というように、具体的な理由が欠如していたり、留学をめぐる思いはあっても将来の職業観が漠然としている傾向が見られた。

特に、職業キャリア型の3人の女子学生が、英語留学があらゆるキャリアに万能という見方を持っていたことに比べると、ライフ・キャリア型のスミレやチアキは、英語留学とあらゆるキャリア形成との接続に対して一歩引いた見方をしていた。具体的には、自分の職業キャリアと、英語を介したグローバルな働き方に距離を置く、あるいは対峙する姿勢が見られた。スミレは、グローバル人材とはどのような人物であるかという問いに対して、グローバル人材の定義方法そのものに懐疑的であった。

> 世界でなんか、あんまり、なんか。世界で活躍できる人材っていうのも、なんかどういう人を求めてるんだろうってちょっと思っちゃうんですけど。別に英語が喋れなくても世界で活躍することはできると思うし、今、英語が必須みたいになってますけど。なんか、別に、それを強要しなくてもいいんじゃないかなぁ。（中略）なんか、そんなグローバル、グローバル言わなくて

も、って私は思うんですけど（スミレ1回目）。

チアキは、グローバル人材について「多分、海外に行って、なんか現地の人とかと交渉とかをして（中略）日本と外国の商談とかを成立させたりとか、日本の技術を外国とかに入れるためになんか、必要な人材」（チアキ1回目）と語ったが、そのような人材になりたいかを尋ねたところ、以下のように回答した。

なれたらなれたにこしたことはないかなって思いますけど、なんか、別に積極的になりたい、みたいまでは思ってないです（チアキ1回目）。

帰国後のインタビューでも、やはり留学経験を職業キャリアに結びつけようとする語りは見られなかった。チアキは、どのような仕事に関わりたいかの明確なビジョンはないまま、安定志向を支持し、とりあえず公務員になるために試験対策準備を進める予定であるとした。英語は、できれば仕事に使えれば良い程度という認識に変化はなかった。スミレは、帰国後、将来の職業キャリアについてはまだ具体的ではないが、英語の習得の観点からは今回の留学に満足をしたため、英語以外の学習に力を入れると語った。また、チアキもスミレも、将来の居住地は日本とすることを希望していた。

ユウタは、どのインタビュイーと比べても、英語は多文化へのアクセスのために便利な言語の一つであるという認識が強く、将来は英語圏に限らず、海外に住みたいと考えていた。例えば、留学生交流サークルに所属し、東アジアや北欧など幅広く他国からの留学生との接点があり、英語力の向上が、英語圏の人々のみならず「いろんな人」（ユウタ1回目）とのコミュニケーションにつながるという考えを持っており、英語を職業キャリアのための武器として戦う企業戦士像とは異なっていた。例えば、ユウタの将来の職業は、留学前より漠然としか描かれてはおらず、また、いわゆるホワイトカラー職を希望していないことが随所で見られた。

チカ：　そうなんですか。でも、1回生で、将来どういうふうになりたいですか？将来の夢。
ユウタ：まだ、見つかってないんです。（中略）
チカ：　じゃ、そのときには、こうなりたいってのはありますか？
ユウタ：そんなにないんですよ。もう別に、普通に田舎で農業してもいいんじゃないかって。
チカ：　あ、本当ですか。
ユウタ：そんな、めっちゃ働いてバリバリとか、そんな希望はないですね。願望。
（ユウタ1回目）

また、職業キャリア型のカイトと同様に、ユウタも「仕事ばっかりして、家族とかをないがしろにしたくない」（ユウタ　1回目）と語り、仕事一辺倒ではなく、家庭と仕事の両立を図ろうとする姿勢が見られた。留学後、ユウタは、他の英語圏への留

学の思いが強くなり、アメリカに長期留学を行うべく留学の申請をしていた。しかし、この長期留学についても、研究者になる、大学院に進学する、といったような具体的な職業キャリアにつながるものではなく、経験を増やしたい、語学力を向上させたい、といったように自分探しの目的によるものが大きかった。

以上のライフ・キャリア型のインタビュイーの語りを、職業キャリア型のインタビュイーの語りと比較した特徴として2点あげる。1点目は、インタビュイーたちは、英語留学を、あくまでも視野を拡大させライフ・キャリアを充実させる一環として位置づけていた。特に、ライフ・キャリア型の女子学生の語りは、職業キャリア型の女子学生と対照的であり、英語を使って海外に住みたい、勤務をしたいという思いは持っていないことが窺えた。さらには、スミレのように、英語留学が職業キャリアと直結するものであるという言説を懐疑的あるいは俯瞰的に捉える傾向が見られた。このことは、キタムラアヤ（Kitamura Aya）が、女性向け雑誌の読み手である日本人女性たちが、雑誌の中で登場する英語に関する言説や表象を鵜呑みにすることなくディコード（decode）する姿と一致する（Kitamura 2016）。つまり、メディアや社会で表象されるような理想像に対して、その読み手が必ずしも同様の姿を理想化するとは限らず、ときにはメディアや社会で理想化される像を内在化させ、ときには俯瞰的にその姿を捉えているという様子が窺えた。このことは、女子学生のインタビュイーに限ったことではない。2つ目の特徴とつながるが、職業キャリア型のカイトと同じくユウタも、仕事一辺倒の働き方を拒み、家庭も重視したいという語りを行った。しかし、国内で官僚を目指すカイトとは異なり、ユウタは田舎で農業をするという選択肢も考えているなど、いわゆるホワイトカラーと呼ばれる職種に就くことにすら消極的であり、経済的な優位さではなく、あくまでも自分の成長に重きを置いていた。ユウタの理想像も、政府が打ち出すグローバル人材像とは異なっていた。

3. 職業キャリアとライフ・キャリアのバランス―― 仕事と家庭生活

次に、インタビュイーたちは長期的なキャリアとして、家庭生活や結婚と仕事のバランスをどのように捉えているのかを分析していく。まず、結婚後も仕事を続けたいかを尋ねたところ、職業キャリア型の4人（女3人、男1人）は、結婚後も仕事を続けたいとした。留学動機が職業キャリアと結びついていたインタビュイーの方が、公領域での長期的スパンでのキャリア形成に意欲的であると捉えることができる。一方で、ライフ・キャリア型3名（女2人、男1人）については、仕事継続への不安や、結婚後は仕事を辞めてもいいという語りを行い、公領域でのキャリア形成に、やや消極的であった。例えば、ライフ・キャリア型の女子学生には、次のような語りが見られた。

チカ：　将来的には自分が仕事やめて、もし稼ぎがあるんだったら、専業主婦になってもい

いやって思いますか。

チアキ：それをすごく悩んでて、なんか、私は結婚して、子どもができてからも一応働き続けたいなって思ってるんですけど、でもなんか、それと同時に子どもとかできたら、ずっと子どものそばにいてあげたいとかっていう思いもあるんで、まだ、その辺はわかんないですね。

（チアキ1回目）

チカ：　もしも、選ぶパートナーに、その、じゃ、僕が専業主夫になるから、スミレさん働いてよ、みたいなポジションはどうですか？

スミレ：うーん、それは、うーん。ちょっと違和感はあるかも。

チカ：　やっぱり働いて欲しい？

スミレ：そう。

チカ：　社会で。

スミレ：ですね。私も本当に定年まで、ものすごい働きたいっていうのではないし、別に主婦してもいいとは思うんで、やっぱ向こうがするくらいなら私が（笑）。

（スミレ1回目）

これらの語りから、結婚後は、家庭内で結婚相手である男性パートナー＝主たる稼ぎ手の補助的立場になることを望んでいる姿勢が窺える。同じく、他のインタビューにも、結婚後に自分が主たる稼ぎ手になりたいか、あるいは、結婚相手に稼ぎ手になって欲しいかを尋ねたところ、全インタビューの考えの中に性別役割意識があり、ユウタを除いては、男性稼ぎ主型を受け入れる、あるいは、それに対抗することへの不安が見られた。

特に、興味深いのは「専業主婦絶対いや」（アコ1回目）と断言していた職業キャリア型の女子学生アコですら、自分が主たる稼ぎ手になることにためらいを示した。

チカ：　じゃもし、結婚するじゃないですか、そしたら収入として、自分がもっと稼いであげてもいいか、向こうが稼いでほしいか。

アコ：　（笑）

チカ：　経済的にどう思いますか？

アコ：　やっぱでも、私より稼いでくれたら、すごいうれしいですね。

（アコ1回目）

一方、ユウタについては、女性稼ぎ主型を支持する考えが見られた。

チカ：　働くんだったら、一緒に家事やるし、働かないんだったら、まぁ家事はメインで奥さんにしてもらってみたいな？

ユウタ：そうですね、好きにしてくれって思います。最悪、僕、主夫でもいいですもん。

（ユウタ1回目）

しかしながら、ユウタの「最悪、僕、主夫でもいいですもん」という語りから、男性中心主義の働き方が日本では常識ではあるものの、それとは異なる選択を敢えてとることも視野に入れているという姿勢が見て取れる。

以上、全インタビュイーの考えの中に、男性中心主義的な働き方が日本社会の前提にあるという認識が窺え、これらの考え方は、やはり留学後も変化はなかった。注目すべきは、アコのように、留学と職業キャリアを積極的に結びつけ、海外で活躍することを希望する女子までもが、最終的には男性稼ぎ主型を受容してしまう姿勢が見られた点である。大学生の職業選択とジェンダーに関しては数多くの研究があり、2000年代に入っても、女子学生は家庭重視の職業観を持ち、男子学生は職業キャリアを重視する傾向にあることが明らかとなっている（牛尾 2003; 加藤 2009）。これらの先行研究は、特に、偏差値の高い大学を対象としていたわけではないが、インタビュイーが高学歴の学生であった本研究でも、先行研究と同様の職業キャリアの考えの違いが男女間で見られた。男女間で異なるキャリア形成志向がある傾向を示しながらも、上野淳子は、4年生大学に通う女子大学生と男子大学生、女子短期大学生へのアンケート調査を比較し、学歴に応じて職業観に違いがあることに着目する。男女では、女子学生の方が家庭中心の将来像を描きやすい一方で、女子学生間の比較では、女子大生よりも女子短期大学生の方が、より家庭中心の将来像を描きやすく、男女のジェンダー間格差よりも、学歴格差が職業キャリアに大きな影響を及ぼし得ると考察している（上野 2012）。学歴格差に着目し、大沢真知子は、女子の中でも高学歴女子の離職の原因は、就職後の仕事での行き詰まりが原因だと考察する（大沢 2015）。数土直紀も、高学歴女子に焦点をあて、高学歴女子が、就職後、家父長制の労働市場の中で男性と同様の職業キャリアを形成しようとする際には、物理的・精神的負担が大きくなり、合理的選択によってキャリアの形成・維持を断念する、という推察を行っている（数土 2006）。しかしながら、本研究で、男性稼ぎ主型のジェンダー規範を受け入れる、あるいは、受け入れざるを得ないとする傾向が、海外での活躍に意欲的で且つ就職前の高学歴女子留学経験者において見られたのは興味深い。海外での職業キャリア形成を目指す高学歴女子でさえ、労働市場に出る前の早期の段階においてこのような傾向にあることは注目に値し、学歴と留学経験、ジェンダーの違いに着目しながら、就職前の大学生がどのようにキャリア形成を描いているかについて、さらなる研究が期待される。

次の量的調査では、大学生の留学希望の有無と、ジェンダー、職業キャリアの中でも特に結婚後の職業キャリアに焦点をあて、さらに大きなデータを扱い分析していく。

Ⅵ. 量的調査の結果と考察

前述の質的調査では、1人（ユウタ）を除くインタビュイー全員が、男性稼ぎ主型を支持あるいは受容していた。留学と職業

とを結びつけ、海外勤務も厭わないとした職業キャリア型の女子インタビュイーまでもが、男性稼ぎ主型の働き方に疑問を持つ姿勢を見せながらも、最終的には受容していた。質的調査では、留学を希望する学生のみを対象としていたが、日本人大学生は男性稼ぎ主型のジェンダー規範を男女ともに受け入れる傾向にあるのか、また、その傾向は留学希望の有無や職業キャリア志向の高低によって差が生じるのか、比較調査を行うため、関西圏の大学生299人（女178人、男121人）に対してアンケートを実施した。平均年齢は19.5歳であった。今後留学をしたいと希望するものは85人、希望しないものは145人、無記入は69人であった。データの分析にあたっては、結婚後の働き方、留学希望の有無、男女差を変数とした。ジェンダー、ならびに留学希望の有無に関する問いに加え、質問紙調査では以下のような項目が問われている。

11.〈全員〉将来、ご自身は、結婚後に働いていたいですか？既婚者の方は、結婚後、働いていますか？
□はい　□いいえ　□わからない

11-1.〈「はい」と答えた方のみ〉どのような働き方をしたいですか。あるいは、していますか？
□主たる家計の稼ぎ手　□夫または妻、パートナーの補助程度

表2は、回答者の留学希望の有無と結婚後の仕事の継続希望の有無について、表3は、回答者のジェンダーと、結婚後の仕事の継続希望の有無のクロス集計表である。全ての回答数299のうち、有効回答数は230であった。留学希望と結婚後の仕事の継続希望について、カイ二乗検定を行った結果、有意差が認めらなかった（p=1.000）。また、Cramer's Vの効果量を算出した結果、効果量はほとんどみられなかった（Cramer's V=0.004）。よって、二つの変数には関連があるとは言えない結果となった。一方、

表2　留学希望有無と結婚後の仕事の継続希望有無のクロス集計表

		結婚後の仕事の継続希望		χ2値	自由度	P値	有意記号	Cramer's V	効果量
		希望する	希望しない						
留学希望	希望する	77（90.6%）	8（9.4%）	0.000	1	1		0.004	効果量ほとんどなし
	希望しない	131（90.3%）	14（9.7%）						

n=230
† p < .10, *p < .05, **p < .01, ***p < .001

表3　ジェンダーと結婚後の仕事の継続希望有無のクロス集計表

		結婚後の仕事の継続希望		フィッシャーの正確確率検定		Cramer's V	
		希望する	希望しない	p値	有意記号	V	効果量
ジェンダー	男性	99（95.2%）	5（4.8%）	0.041	*	0.147	効果最小
	女性	109（86.5%）	17（13.5%）				

n=230
† p < .10, *p < .05, **p < .01, ***p < .001

ジェンダーと結婚後の仕事の継続希望について、フィッシャーの正確確率検定を行った結果、有意差が認められた（p=0.041）。また、Cramer's V による効果量を算出した結果、小さい効果量がみられた（Cramer's V=0.147）。つまり、男性の方が結婚後も継続して働くことを選択する傾向が大きいと言える。

表4は、結婚後も働きたいとした回答者のうち、留学希望の有無と結婚後に希望する働き方（主たる稼ぎ手か、補助程度か）について、表5は、ジェンダーと結婚後に希望する働き方（主たる稼ぎ手か、補助程度か）についてのクロス集計表である。有効回答数は208であった。留学希望の有無と結婚後に希望する働き方について、カイ二乗検定を行った結果、有意差が認めらなかった（p=0.742）。また、Cramer's V の効果量を算出した結果、効果量はほとんどみられなかった（Cramer's V=0.034）。よって、二つの変数には関連があるとは言えない結果となった。一方、ジェンダーと結婚後に希望する働き方について、フィッシャーの正確確率検定を行った結果、有意差が認められた（p=0.000）。また、Cramer's V による効果量を算出した結果、大きい効果量がみられた（Cramer's V=0.629）。つまり、ジェンダーが、結婚後に主たる稼ぎ手を希望するか、補助程度の働き方を希望するかに関連することが明らかとなった。男性の99.0%が、主たる稼ぎ手となりたいとし、女性の59.3%が補助程度の働き方を希望しており、男性稼ぎ主型が男女双方に支持される結果となった。

以上の結果を踏まえ、2点特徴をあげる。まず、留学希望者と留学を希望しない者を対象とし、職業キャリア（1. 結婚後の仕事の継続希望の有無、2. 結婚後に希望する働き方）との関連があるかを見た結果、留学希望の有無と、1. 結婚後の仕事の継続希望の有無ならびに2. 結婚後に希望する働き方との間に関連は見られなかった。このことは、留学を希望しているからといって、職業キャリアに意欲的であるとは言えない

表4　留学希望有無と結婚後に希望する働き方のクロス集計表

		結婚後に希望する働き方		χ2値	自由度	P値	有意記号	Cramer's V	効果量
		主たる	補助程度						
留学希望	希望する	51（66.2%）	26（33.8%）	0.108	1	0.742		0.034	効果量ほとんどなし
	希望しない	91（69.5%）	40（30.5%）						

n=208
† p < .10, *p < .05, **p < .01, ***p < .001

表5　ジェンダーと結婚後に希望する働き方のクロス集計表

		結婚後に希望する働き方		フィッシャーの正確確率検定		Cramer's V	
		主たる稼ぎ手	補助程度	p値	有意記号	V	効果量
ジェンダー	男性	98（99.0%）	1（1.0%）	0.000	***	0.629	効果最大
	女性	44（40.4%）	65（59.6%）				

n=208
† p < .10, *p < .05, **p < .01, ***p < .001

ことを示唆する。

一方で、回答者のジェンダーと 1. 結婚後の仕事の継続希望の有無、2. 結婚後に希望する働き方には関連が見られ、男性は主たる稼ぎ手となることを希望し、女性は補助程度となることを希望する傾向が見られた。質的調査では、7名中6名が男性稼ぎ主型の支持や受容、あるいは女性稼ぎ主型への抵抗を示したが、量的調査でも、留学希望の有無に関わらず、男性が主たる稼ぎ手となるべきというジェンダー規範を男子・女子大学生ともに受け入れる傾向にあることが明らかとなった。

Ⅶ. 結論

日本人留学者たちが、どのように短期留学経験をキャリア形成と結びつけているのか、特に、彼らを取り巻くジェンダー規範やジェンダー規範に対する彼らの捉え方に着目しながら分析してきたが、主な知見についてまとめる。

まず、本稿で対象とした短期留学プログラムは、キャリア形成のために設計された留学プログラムではなかった。しかしながら、キャリアを職業キャリア、ライフ・キャリアと再定義し分析した結果、男女に関わらず全員が、語学習得のみならず職業キャリアやライフ・キャリアと短期英語留学を結びつけ、今回の留学に参加していた。短期留学は、費用対効果が高い点（Engle, L. and Engle, J. 2003）や、中期・長期留学等の本格的な留学に向けた「橋わたし」（小林 2013）、「おためし」（岩城 2012）の学習環境として提供され、最も多くの留学者数を確保している。その手軽さから、留学者数増加の一助として注目される一方で、短期留学前の段階から、個別の職業キャリアやライフ・キャリアについて具体的な視野を持たせるような教育サポートの例はほとんどない。とりあえずお試しで、という軽い動機づけが奨励されている風潮にあるが、短期留学であっても、その経験とあらゆるキャリアを結びつけやすい環境にあるからこそ、具体的なキャリア形成のきっかけとなる教育場面として活かされるよう、留学プログラム設計が必要とされる。

ジェンダー的視座とキャリア形成、留学とを接続することは、留学プログラム設計の一助となり得ると考えられる。本稿では、留学をキャリア形成の一環として活用するために、日本人留学者たちの批判的視点かつジェンダー的視座の必要性を見出した。質的調査の考察より、私・公領域でジェンダー化して描かれる留学生像に対して、日本人留学者たちがキャリア形成上、さまざまなポジショニングをとっていることが明らかとなった。ヘゲモニックな男性性と結びつくグローバル人材像や、英語圏・西洋圏で恋愛を成就する日本人女子といった、政府政策やメディアを通して表象されるステレオタイプな男女の留学生像がそのまま投影されたような語りが必ずしも大半を占めるわけではなく、留学経験者たちが個別に描く理想像との差異について観察することができた。しかしながら一方で、個別の理想的なキャリアの根底に、男女に関わらず共通認識として、男性稼ぎ主型が根強くあることが質的調査ならびに量的調査から示唆された。質的調査では、イ

ンタビュイー7人中6人が男性稼ぎ主型を支持あるいは受容していた。また、短期留学と職業キャリアを直結させ、結婚後も仕事を続けたいと強く主張した女性インタビュイーでさえも、最終的には男性稼ぎ主型の考えから逃れられないでいた。このことは、社会で活躍したいという意欲は高いものの、家父長制の社会におけるジェンダー規範には抵抗できない留学経験者たちの葛藤のあらわれと捉えることができる。アンケート調査においても同じく、留学希望の有無に関わらず、男性は主たる稼ぎ手を希望し、女性は補助的立場を選択する傾向が見られた。留学を希望しているからといって、長期的職業キャリア形成意欲が高いとは言えず、むしろ、ジェンダーが結婚後の働き方の選択と関連があると言える結果となった。留学経験を自分のあらゆるキャリア形成に積極的に結びつけようと意欲的であっても、彼らを取り巻くジェンダー規範の内在化が、社会における彼らの活躍を最終的には制限してしまうと解釈できる。短期留学とキャリア形成を考える上で、社会の中で留学がどのようにジェンダー化され表象されているのかを認識すること、そして、これらを鵜呑みにすることなく批判的、俯瞰的に分析し、職業キャリアとライフ・キャリアを細分化しながら、個別の具体的なキャリアプランについて留学前ならびに留学中とその後を通して検討する機会を留学者が持つこと、の重要性が示唆される。

参考文献

Braun, Virginia and Victoria Clarke, 2006, “Using Thematic Analysis in Psychology”, *Qualitative Research in Psychology,* 3: pp. 77-101.

Connell, W. Raewyn, 2005, *Masculinities 2nd edition*, Berkeley, University of California Press.

Connell, W. Raewyn and Julian Wood, 2005, “Globalization and Business Masculinities”, *Men and Masculinities*, 7: pp.347-64.

Connell, W. Raewyn and James W. Messerschmidt, 2005, “Hegemonic Masculinity: Rethinking the Concept”, *Gender and Society*, 19(6): pp.829-59.

Creswell, W. John, 2007, “Choosing a Mixed Methods Design”, In John W. Creswell and Vicki L. Plano Clark eds., *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Thousand Oaks and California, Sage.

江利川良枝, 2017,「大学における初年次のキャリア教育――大学生の発達課題とアイデンティティ形成に着目して――」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』（名古屋学院大学産業科学研究所）53（4）: pp.231-44.

Engle, Lilli and John Engle, 2003, “Study Abroad Levels: Toward a Classification of Program Types”, *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, *9*: pp.1-20.

グローバル人材育成推進会議, 2012,「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議　審議まとめ）2012年6月4日」, 首相官邸政策会議 グローバル人材育成推進会議, (2020年7月10日取得 , https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global).

糸井重夫, 2015,「グローバル社会における体系的キャリア教育」『松本大学研究紀要』（松商学園松本大学）第13号 : pp. 91-101.

岩城奈巳, 2012,「留学推進の取り組みが交換留学に与える影響についての実態調査」『名古屋大学

留学生センター紀要』（名古屋大学国際教育交流センター）第10号: pp.23-9
Kato, Etsuko, 2015, “When a Man Flies Overseas: Corporate Nationalism, Gendered Happiness and Young Japanese Male Migrants in Canada and Australia,” *Asian Anthropology*, 14(3): pp.220-34.
加藤容子, 2009,「女子大学生のキャリア意識」『人間関係学研究』（椙山女学園大学）第8号: pp.11-6.
河合塾（平成29年度文部科学省委託事業）, 2018,「『日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究』成果報告書」, 文部科学省ホームページ,（2020年5月11日取得, https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/__icsFiles/afieldfile/2018/11/22/1411310_1.pdf）.
Kelsky, Karen, 2001, *Women on the Verge: Japanese Women*, Western Dreams, Durham, NC, Duke University Press.
菊池武剋, 2012,「『キャリア教育』特集――この学問の生成と発展」『日本労働研究雑誌』（独立行政法人 労働政策研究・研修機構）54（4）: pp.50-3.
木村涼子, 2000,「フェミニズムと教育における公と私」『教育学研究』（日本教育学会）67（3）: pp.302-10.
Kitamura, Aya, 2016, “English Mystique? A Critical Discourse Analysis on Gendered Bilingualism in Japan”, *Gender and Language*, 10(1): pp.1-20.
Kitano, Chika, 2020, “Study Abroad as a Space where Akogare (憧れ) Circulates”, *Gender and Language*, 4(2): pp. 197-219.
小林文生, 2013,「短期海外研修による教育的効果の再検討――学生の報告書の多面的な分析を通して」『人文・自然研究』（一橋大学大学教育研究開発センター）第7号: pp.162-185.
子島進・藤原孝章, 2017,「大学における海外体験学習」子島進・藤原孝章編『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版.
文部科学省, 2004,「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書――児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために――の骨子（2004年1月28日）」, 文部科学省ホームページ,（2020年7月10日 取得, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002.htm）.
――――. 2014,「トビタテ！留学JAPAN」, 文部科学省ホームページ,（2019年11月5日取得, https://tobitate.mext.go.jp）.
――――. 2019,「『外国人留学生在籍状況調査』及び『日本人の海外留学者数』等について」, 文部科学省ホームページ,（2019年12月4日取得, http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/__icsFiles/afieldfile/2019/01/18/1412692_1.pdf）.
日本学生支援機構, 2019,「平成29年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」, 日本学生支援機構ホームページ,（2019年4月26日取得, https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2018/index.html）.
西村淳子, 2014,『子育てと仕事の社会学――女性の働き方は変わったか（現代社会学ライブラリー15）』弘文堂.
OECD, 2019a, Part-time Employment Rate (indicator), OECD iLibrary,(Retrieved July 10, 2020, https://doi.org/10.1787/f2ad596c-en).
――――. 2019b, Women in Politics (indicator), OECD iLibrary,(Retrieved July 10, 2020, https://doi.org/10.1787/f2ad596c-en).
大沢真知子, 2015,『女性はなぜ活躍できないのか』東洋経済新報社.
留学 Debut, n.d.,「女子に人気の留学先ランキング 2020年版」, 留学くらべーるホームページ,（2020年5月11日取得, https://ryugaku.kuraveil.jp/lp/re/standard).

新見有紀子・岡本能里子, 2017,「海外留学とキャリア形成――期間別でみる海外留学のインパクト」子島進・藤原孝章編『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版.

Shimmi, Yukiko and Hiroshi Ota, 2018, "'Super-short-term' Study Abroad in Japan: a Dramatic Increase", *International Higher Education*, 94: pp.13-5.

数土直紀, 2006,「ジェンダーと合理的選択」江原由美子・山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』有斐閣.

Takahashi, Kimie, 2013, *Language Learning, Gender and Desire, Japanese Women on the Move*, Bristol, Buffalo and Toronto, Multilingual Matters.

上野淳子, 2012,「ジェンダーおよび学歴による将来像の違い」『四天王寺大学紀要』（四天王寺大学）第54号: pp. 183-96.

牛尾奈緒美, 2003,「変化する大学生の就職意識と企業の採用活動に求められるもの」『明治大学社会科学研究所紀要』（明治大学社会科学研究所）第41巻第2号: pp. 259-84.

横田雅弘・太田浩・米澤彰純・北村友人・秋庭裕子・新見有紀子・堀江未来・ほか, 2016,「グローバル人材育成と留学の長期的インパクトに関する国際比較研究　報告書」, 国際教育研究コンソーシアム, (2019年1月25日取得, http://recsie.or.jp/wp-content/uploads/2016/04/Survey-on-study-abroad-impact_final20170529.pdf).

若林真美・家島明彦・上須道徳・思沁夫, 2019,「大学院における短期海外体験型学習（海外フィールドスタディ）がキャリア形成に与える影響」『大阪大学高等教育研究』（大阪大学全学教育推進機構）第7号: pp. 23-30.

（掲載決定日：2020年6月17日）

Abstract

Gendered Study Abroad and Career Prospects

Chika Kitano

This study investigated the ways in which short-term study abroad (SA) English language learning students from Japan construed their SA experiences. In particular, the investigation scrutinized how their perceptions of gender norms were interconnected with their career prospects. The study adopted an exploratory sequential research design. Narratives were initially derived from seven male/female Japanese students who participated in an English language learning SA course. The obtained narratives were thematically analyzed. Next, Pearson chi-square tests and Fishers' exact test were performed on data collected via a questionnaire survey of 299 Japanese college students to investigate associations between three variables: gender, desire for SA, and ideal working style after marriage. In discussing the obtained relationships, emphasis was placed on the individual ideas and experiences articulated by SA students. The result of the qualitative research showed that the participants were not collective entities that reflected the gendered representation of males and females disseminated via media or established by governmental SA policies. Nonetheless, the results of both the qualitative and quantitative evaluations demonstrated that participants were tacitly constrained by the gender norm, believing that men should be the breadwinners. This study indicates that the internalization of gender norms prevents Japanese youth from benefitting from their SA experiences and taking initiatives for social change.

Keywords
short-term study abroad, gender, vocational-career, life-career